大塚楠緒子

長谷川時雨

もうやがて二昔（ふたむかし）に近いまえのことでした。わたしは竹柏園（ちくはくえん）の御弟子（おでし）の一人（ひとり）に、ほんの数えられるばかりに、和歌をまなぶというよりは、『万葉集』『湖月抄』の御講義を聴講にいっておりました。すくなくても十人、多いときは二、三十人の人たちが、みんな熱心に書籍の中へ書入れたり、手帖（ノート）へうつされたりしていました。男子も交る時もありましたが、集りは多く女子（おんな）ばかりで、それも年若い美しい方たちが重（おも）でした。

美しい方たちの寄合うなかでも、何時（いつ）までも忘れぬ印象をとめているという方は、さてすくないものと、今更に淋（さび）しい思出のなかに、くっきりと鮮かに初対面

の姿の目に残っているのは、大塚楠緒子（おおつかなおこ）女史の面影（おもかげ）でした。

やや面長（おもなが）なお顔だち、ぱっちりと見張った張りのある一重瞼（ひとえまぶち）。涼しいのも、爽（さわや）かなのも、凛（りん）としておいでなのもお目ばかりではありませんでした。明晰（めいせき）な声音（こわね）やものいいにも御気質があらわれていたのでしょうと思います。思うこともなげな、才のある若い美しい方の頬（ほお）の色、生々（いきいき）として、はっきりと先生におはなしをなさってでした。濃い髪（おぐし）を前髪を大きめにとって、桃割れには四分ばかりの白のリボンを膝折り結びにかたく結んでかけてお出（いで）でした。二尺の袖（そで）かと思うほど

の長い袖に、淡紅色（ときいろ）の袖を重ねた右の袂（たもと）を膝の上にのせて、左の手で振りをしごきながら、目を先生の方を正しくむいてすこし笑ったりなさいました。

帯は高く結んでお出（いで）でしたが、どんな色合であったか覚えておりません。忘れたのか、それともその時は、ずっと襖（ふすま）の側に並んで座（すわ）っていましたから、其処（そこ）から見えなかったのかも知れません。召物（めしもの）は白い上布（かたびら）であらい絣（がすり）がありました。

その方がその当時、一葉女史を退（の）けては花圃（かほ）女史と並び、薄氷（うすらい）女史より名高く認められていた、楠緒（くすお）女史とは思いもよりませんでした。自分たちと同じほどの

年頃のお方かと思っていましたが、女史は二十一か二の頃でありましたろう。お連合（つれあい）の博士は海外へ留学なさってお出のころでした。

四年ばかりたちました。春三月に竹柏会（ちくはくかい）の大会が、はじめて日本橋倶楽部（くらぶ）で催されたおりにはっきりと楠緒女史はあの方だと思ってお目にかかりました。もうその頃はずっと地味づくりになって、意気なおつくりで黒ちりめんの五ツ紋（もん）のお羽織を着てお出でした。女のお子のおありのこともその時に知りました。

その後（のち）も何かの会のおり、写真を写すおり、御一緒になって一言二言（ひとことふたこと）おはなししたこともありましたが、

私の思出は何時(いつ)も一番お若いときの、袖を撫(な)でておはなしをなさっていた面影が先立ちます。

容姿(かたち)も才智(ざえ)も世にすぐれてめでたき人、面影は誰にも美しい思出を残している女史は、数えれば六年(むとせ)前、明治四十三年に三十六歳を年の終りにして、霜月(しもつき)九日の夕暮に大磯の別荘にて病(やまい)のためにみまかられてしまいました。

女史には老たる両親(ふたおや)がおありでした。三人の女のお子と、その折に二歳(ふたつ)になる男のお子とをお残しでした。今は、二人の女のお子は母君(ははぎみ)のあとを慕(した)って、次々に世をさられました。

女史の遺著は小説、歌文、詩、脚本など沢山にあるなかに、『晴小袖（はれこそで）』は短篇小説をあつめ、『露』は『万朝報（よろずちょうほう）』に連載したのが単行本になりました。『朝日新聞』にて『空（そら）だき』をお書きなすってから、作風も筆つきも殊更（ことさら）に調ってきて、『空だき』の続稿の出るのがまたれました。が、それは女史の胸に描かれただけで、『空だき』が私の読んだものではお別れになってしまいました。

晩年に女史が私淑（ししゅく）なさったのは、夏目漱石先生であったということを後（のち）に聞きました。その夏目先生が楠緒さんをお思出しになったことが最近先生のおかき

になった『硝子戸(がらすど)の中(うち)』の一節にありました。無断でそのことを此処(ここ)へ抜くのは悪いと思いながら、楠緒女史が生(いき)て見えますので、ほんの影だけでもうつさせて頂(いただ)きたいと、私は大胆にもその事まで此処へ取りいれました。

　夏目先生が千駄木(せんだぎ)にお住居(すまい)であったころ、ある日夕立の降るなかを、鉄御納戸(てつおなんど)の八間(はちけん)の深張(ふかはり)の傘(かさ)をさして、人通りのない、土の上のものは洗いながされたような小路を、ぼんやりと歩いていらっしゃると、日蔭町というところの寄席(よせ)の前で一台の幌車(ほろぐるま)にお出合なされました。セルロイドの窓が出来ない時分であったので、

先生は遠目にも乗っているのは女だという事にお気がおつきでした。車の上の人は無心にその白い顔を先生に見せているのが、先生の眼に大変美しく映ったので、凝と見惚れていらっしゃるうちに、芸者だろうというようなお心が働きかけたそうでした。俥が一間ばかりの前へ来たときに、俥の上の美しい人が鄭寧な会釈をして通りすぎたので、楠緒さんだったということに気がおつきなされたのでした。

　その次に先生が楠緒さんにお逢いなされたときに、有のままをお話しなさる気になって、「実は何処の美しい方かと思って見ていました。芸者ではないかしら

とも考えたのです」と仰しゃられたら、楠緒さんは些とも顔を赭らめず、不愉快な表情も見せず、先生のお言葉をただそのままにうけとられたらしかったと、懐しいお話しがありました。

　夏目先生は、楠緒さんのおなくなりの時に、「あるほどの菊投げ入れよ棺の中」という手向の句をお詠みになりました。

『硝子戸の中』その章をお読みなさった大塚保治博士は、「漸く忘れようとすることが出来かけたのに、あれを見てからまた一層思いだす。」と仰しゃったそうです。嘘かまことか知りませんが、正宗白鳥さん

が角帽生という仮りの名でお書きなされたものの中に、大学の文科においでなさった頃の博士と、前東京控訴院長大塚正男氏の長女の楠緒さんとは、思いあっておむかえなされた仲のように書かれてあったかと覚えております。そうでなくても女史ほどの御配偶をお先立てなされたお心持ちは、思出さぬようにとするのが無理な諦（あきら）めだと、お察しすることが出来ます。

明治の文壇に、才媛（さいえん）の出身者を多くだしたのは麹町（こうじまち）の富士見小学だときいております。岡田八千代（おかだやちよ）女史も、国木田治子（くにきだはるこ）女史も富士見小学で学ばれました。楠緒女史もお二人よりは、早くの出身でした。一橋（ひとつばし）

の高等女学校を卒業なされて、博士の留学のお留守中にも、明治女学校に通(かよ)い、松野フリイダ嬢に学び英語を専習されました。ピアノは和歌と同門の友橘糸重(たちばないとえ)女史に教えられてお出でした。絵画ははじめ跡見玉枝(あとみぎょくし)女史に、後には橋本雅邦(はしもとがほう)翁に学ばれました。いつでしたかずっと前に、天女(てんにょ)が花を降らせている画(え)をある展覧会で見うけたことがありました。口の悪い評家はかっぽれ天女なんぞと酷評したことがあってから、公開の席では見ることが出来なくなりました。

　多能な女史は料理についても研究なされて、小集会などもよく催されたようでした。

名誉ある学者の夫人、幸福な家庭の女王、作者としては充分な学殖と貴き未来とをもった、若く美しい楠緒女史は春のころからのわずらいに、夏も越え、秋とすごしても元気よく顔の色もうつくしく、語気も快活に癒る日を待ちくらして、死ぬ日の五日まえには、

> 籠り居は松の風さへ嬉しきに心づくしの人の音づれ

と竹柏園主佐佐木博士のもとへ葉書をよせられたりなされました。

墓表を書かれた人は、楠緒さんの御婚礼のときに、結納書をかかれた人と同じ老人だということを聞いて、

葬式（ほうむり）の日にお友達方は墓表をながめては嘆かれました。

竹柏園先生は、

ゆく秋の悲しき風は美しきざえある人をさそひいにける

うつくしきいてふ大樹（おおき）の夕づく日うするゝ野辺（のべ）に君をはふりぬ

橘糸重女史は、

重き気（け）の我身にせまる暗き室（へや）に、君がためひくかなしびの曲

胸にそゝぐ涙のひぎき堪（た）へがたし、暗（やみ）にうもれて君しのぶ時

心あひの友といふをもはゞかりしかひなき我は世
にのこれども

峰百合子女史は、
ゆきあひし駒込道(こまごめみち)はちかけれどふたゝび君に逢(あ)ふ
よしのなき
いたづらに窓の日かげをまもりつゝ、帰らぬ友の
行方(ゆくえ)をぞおもふ

片山広子女史は、
うつくしきものゝすべてをあつめたる其(その)うつそみ
は隠ろひしはや
さわやかにいと花やかに笑(え)みましゝ、今年の春ぞ

別れなりける

書きながすはかなき歌も清(きよ)らなる御目(おんめ)に入るをほこりとぞせし

千人はゆふべに死にて生るとも二たび来ます君ならめやは

豊島(としま)のや千本(ちもと)のいてふ落葉する夕日の森に御供(みとも)するかな

なき世(よ)まで君が心のかゝりけむその幼児をいだきてぞ泣く

掘りかへす新土(あらつち)の香(か)も痛ましう夕日にそむき只泣かれける

と嘆きうたわれました。誰（たれ）の胸にも楠緒女史は、美しい面影と思出を残してゆかれました。まして大塚博士の悲しみはどれ程でありましたろう。御自分でも癒（なお）るとばかり信じていた死の床の枕上には、紙の白いままのノートが幾冊か重ねられてあったという事でした。そういう悲しい思出は数ある楽しかったことよりも深く、博士が腕に抱（かか）えて帰京なされた、遺骨の重味（おもみ）と共に終世お忘れにならないことでしょう。雑司が谷（ぞうしがや）の御墓（おはか）の傍（かたわら）には、和歌（うた）の友垣（ともがき）が植えた、八重山茶花（やえさざんか）の珍らしいほど大輪（たいりん）の美事（みごと）な白い花が秋から冬にかけて咲きます。山茶花はすこし幽（ゆう）にさびしすぎますが、白

の大輪で八重なのが、ありしお姿をしのばせるかとも
思います。

底本：「新編　近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店
　　１９８５（昭和60）年12月16日第１刷発行
　　１９９３（平成５）年８月18日第４刷発行
底本の親本：「婦人画報」
　　１９１５（大正４）年10月
初出：「婦人画報」
　　１９１５（大正４）年10月
入力：門田裕志
校正：noriko saito
２００７年４月10日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。